

聖書：マタイ7：1～6

説教題：自分の目にある梁

日時：2018年10月14日（朝拝）

今日の御言葉は私たちの日々の人間関係に関わる御言葉です。私たちは他の人と一緒に生活する中で、いつも周りの人々と平和に仲良く暮らせているわけではありません。時に、いやしばしば、お互いの人間関係を壊し、互いに対立し、争う関係になってしまいます。その原因の一つとなっているのが今日のテーマである「さばく」ということです。「さばく」と言うと、私たちは裁判のことを思い浮かべるかもしれませんが。そして私は裁判とは関わったことはないし、ましてやさばく立場に立つこともない。だからこれは私にはあまり関係がないと思うかもしれません。確かに私たちは公的な裁判とはあまり関わりがなくても、私的な裁判はいつもしているのではないのでしょうか。心の中で裁判官の席に着き、周りの人々に判決を下して、さばいているのではないのでしょうか。特にクリスチャンは今や神を知り、すべてを判断する明確な座標軸を持っています。何が正しく、また間違っているのか、聖書を通して絶対的基準を知った者たちです。そういう私たちはともするとその基準で周りの人々をさばきやすい。なぜあの人はあのように行動するのか。なぜあんなことを言うのか。教会の兄弟姉妹に対しても、あの人はクリスチャンなのに、あの振る舞いは一体何なのか。聖書をどう読んでいるのか。さらにはあの執事は、あの長老は、あの牧師・教師は！あるいはあの教会は、この教会は、といった裁判まで始まります。では私たちはそういう判断は一切してはならないということなのでしょうか。他の兄弟姉妹がどうであろうと目をつぶって何も考えないようにすべきなのではないのでしょうか。その行き過ぎを是正するために6節があると考えられます。6節では私たちが物事を判断し、見分けるべきことが命じられています。聖なるものを犬に与えてはいけない、また真珠を豚の前に投げてはいけないと。これは具体的には神の聖なる福音を伝えても、あくまで拒絶し、侮辱するような人には、いつまでも福音を差し出し続けるべきではない！ということを行っている言葉です。私たちはこのマタイの福音書の最後にある大宣教命令の通り、全世界のあらゆる人々に福音を宣べ伝えるべきですが、世の中にはただ反抗するために聖書に接する人がいるものです。聞いても聞いても文句だけ言う人。そういう人にいつまでもこの宝なる福音を差し出し続けるな！ということです。イエス様も後の10章14節で弟子たちに同じことを言われましたし、パウロも使徒の働きの中で、福音に反抗し、暴言を吐くユダヤ人に、「あなたがたは神のこゝばを拒んで、自分自身を永遠のいのちにふさわしくない者になっています。ですから、

見なさい、私たちはこれから異邦人たちの方に向かいます。」と言って、いつまでも語ることをしませんでした。そういう判断は必要だということです。この後 15 節にも「偽預言者たちに用心しなさい」という言葉が出て来ます。そこでも正しい評価、判断、識別が命じられています。

ではイエス様がここの「さばいてはいけません」という言葉で禁じていることは何でしょうか。それは周りの人々の間違いや欠点をいちいち指摘し、あげつらうこと、人のあら探しをし、それを論じたりする態度のことでしょう。私たちは生来的にこのようなことが好きです。それはそのことが私たちの優越感をくすぐるものだからです。私はその間違いを指摘できるほど、良く物事を判断できる人間である。正しいことが良く分かっている人間である。そのように自分を思うことは気持ちが良いことです。そこで頼まれてもいないのに色んな人のことに口をはさみ、上から目線で評価するようなことを言う。しかしそれは私たちの人間関係を壊します。教会の兄弟姉妹の交わりについてもそうです。そうして神に汚名を着せることにもつながりかねません。イエス様はこのように人をさばいてはいけないと言います。その理由として大きく二つのことを述べています。

まずその一つ目の理由は 1 節後半にある通り、「さばかれないため」ということです。人をさばいている時、私たちが忘れていた重大な真理があります。それは私たちは「さばかれる」側の人間であるということです。ではさばく方は誰でしょう。それはもちろん神様です。ですから人をさばく時、そこで私たちがしていることは唯一の審判者である神の席に勝手に上るような真似をしているということです。自分はさばかれる側の人間であることを忘れて一人、神の審判の椅子に上って行って、あなたはこうである！あなたはこうである！と神を演じるようなことをしている。これは神の権限の侵害であり、自らが神に取って代わろうとする、あのエデンの園における人間の最初の罪そのものです。このようなことをする人は当然、神にさばかれるとイエス様は言われます。これはどういう意味でしょうか。クリスチャンはイエス様を信じてさばきから解放されたのではなかったでしょうか。もはやさばきを恐れなくて良い者とされたのではなかったでしょうか。確かにクリスチャンはイエス様を信じることによって永遠の死というさばきからは救われています。しかし聖書は、それとは区別された意味でも「さばき」という言葉を用いています。すなわちやがて天の御国に入る信者に対しても、神はその人の行いを評価し、報いるという意味でのさばきがあると。それは一つにはこの世の歩みにおい

て与えられます。私たちが正しく歩んでいないなら、神はそのことを様々な出来事を通して示されます。それは時に病気という形を取ったり、さらには死という形を取ることさえもすると聖書に言われています。そしてもう一つは最後の日の究極的なさばきです。Ⅱコリント5章10節：「私たちはみな、善であれ悪であれ、それぞれ肉体においてした行いに応じて報いを受けるために、キリストのさばきの座の前に現れなければならないのです。」

その際にどのようにさばかれるのか、その基準が2節にこう述べられています。「あなたがたは、自分がさばく、そのさばきでさばかれ、自分が量るその秤で量り与えられるのです。」ここに私たちが他の人にするように自分も神によってされると言われています。私たちが他の人をさばく時、私たちはそのことを自分は良く知っているということを示しています。しかしその知識を持っている人はまず自分自身がそのように生きる責任を神の前に持っています。ルカの福音書12章48節：「多く与えられた者はみな、多くを求められ、多く任された者は、さらに多くを要求されます。」ですから他人をさばいたその同じ基準で自分もさばかれるのです。私たちが他の人をさばく時の目をちょっと考えてみてください。私たちの目はどんな目をしているでしょう。もしそれと同じ目で神が私を見つめて、やがての日にさばかれるとしたらどうでしょう。それはどんなに恐ろしいことでしょうか。私たちがあわれみの心もなく、ただ責めるだけの目で他の人を断罪するなら、神も同じようにあなたにされる。そのことを真剣に考えるなら私たちは自分のあり方にもっと注意しなければならないのではないのでしょうか。

私たちがさばいてはならない2つ目の理由が3節以降にあります。それは一言で言えば、私たちには人をさばく資格あるいは能力が全くないということです。ここで他人の目の中に入っているものが「ちり」といわれています。非常に小さいものです。私たちはその小さいものを取り上げて色々論じやすい。しかしその私たち自身の目には梁が入っているとされています。ここで次のように言われているのではないことに注意して下さい。「なぜ兄弟の目のちりに目をつけるのか。あなたの目の中にも同じちりがあるではないか！」そうではなく、イエス様が言っているのは、兄弟の目の中には「ちり」があるが、あなたの目の中には「梁」が入っている！ということです。「梁」とは辞書を引くと、「建物の水平方向に架けられ、建物の上からの荷重を支える部材のこと」とあります。柱と柱の間に横に渡して、全体を支えているあの大きな横木のことです。そんなものが目の中に入るはずはありません。しかしイエス様はそれほどのとてつもなく

大きな問題がさばくあなたの目の中にあるではないかと言っているのです。なのに自分の問題は問題にしないで、人の目の中のちりにばかり目を留める。そして「それを私に取らせて下さい」などと申し出る。これはとてもいやらしい言い方です。いかにも相手のために「取らせて下さい」と親切を装っているようでありながら、実際にしていることは自己主張。相手の過ちを指摘して、自分の正しさを宣伝しているだけです。イエス様はそういう私たちに対して、5節で「偽善者よ！」と厳しい言葉を発されます。もし本当に正しいことに関心があるなら自分が抱えている問題を先に取り扱うであろうはずだからです。そのことをいい加減にしながら、他人の問題ばかり指摘するのは、真の意味で義に関心のある人ではあり得ない。偽善者だ！とイエス様は言われる。

私たちはどうしたら良いのでしょうか。イエス様はそのことについても、はっきり教えてくださいました。それは5節にあるように、「まず自分の目から梁を取り除きなさい」ということです。「まず」という言葉が大事です。ここに私たちが注意すべき順番が語られています。誰かの目のちりが気になった時、私たちはそちらから始めてはならないのです。「まず」自分の目の中に梁があるのではないかと自己点検することから始めなければならない。梁が入っている状態では、とても相手の目のちりを取ってあげる奉仕はできません。相手にひどいダメージを与えるだけです。しかしどうやって自分の目からこの梁を取り除くことができるのでしょうか。私たちは自分の目の中の梁の正体を見つめれば見つめるほど、それは自分の力では取れないと思うでしょう。その目の梁とは、私たちの内になお残存し、隙を見出しては私たちに支配しようとする罪の力でしょう。自分のことは棚に上げて、他人の問題点ばかり指摘しようとする偏った心でしょう。そうして自分は正しい人間だとして、自分を持ち上げようとする自己義認の心でしょう。そのためには誰かを踏み台にし、叩きつぶすことも厭わない。これはもはや神によって取り除いていただくしかない。神に私の心を探っていただき、この途方もなく大きな罪の問題を神に取り扱っていただく。その罪を御前に告白し、イエス・キリストの十字架による赦しと聖めをいただく。そうして新しい性質が培われ、自分を支配するようにと造り変えていただくことです。

そうする人に祝福が備えられています。5節後半：「そうすれば、はっきり見えるようになって、兄弟の目からちりを取り除くことができます。」今日の御言葉はただ自分の目の中の梁を問題にすべきであって、他人のことはとやかく言うべきではないという否定的なことだけを述べているものではありません。ここに「そうすれば、はっきり見

えるようになって、兄弟の目からちりを取り除くことができます」と積極的な道が示されています。すなわち「自分の目の中の梁を取り除く」という大手術を受けた人こそ、真の意味で他の人を助け、その益に仕えることができる者になるということです。

目は体の中でも最もデリケートな部分です。荒々しく手を突っ込んではいけません。細心の注意が必要です。しかし自分の目から梁を取り除いた人にはそれができます。その人は自分がただ神のあわれみによって立っている者であることを知っています。途方もなく大きな梁が目の中にあるという、救いようのない自分だったのに、神はそんな私を厳しくさばかず、イエス・キリストの十字架を通して私を赦し、またやがての日に完成に至る聖めのプロセスを導いてくださっている。その神のあわれみと救いを感謝する人は、自分もそうして頂いたように他の人にもしようと導かれるでしょう。すなわち上から見下ろして助けてやるという態度ではなく、へりくだって、相手を愛してそのことをするように、と。エペソ書4章15節に「愛をもって真理を語り」という言葉があります。私たちが真理を語る時、それは愛とセットでなければならない。愛とともに語られる時、初めてその真理は相手を助けるものとなります。ですからもし私たちが誰かに向かって忠告のようなことをして、相手が受け入れなかった場合、せっかく言ってやったのにあの人には聞き入れなかった！と相手の問題にするのではなく、まず自分を反省しなければならない。私は自分の目の中に梁が入ったままで、良く見えない手で乱暴に相手の目に手を突っ込んだのではないか。私は愛がない状態で、愛に包まないで、ただ真理をぶつけたのではないか。神がするのは違う方法で、相手に真理を投げつけただけではないのか。

私たちの周りの人々との関係はどうでしょうか。自分は正しいことが見えていると自負するあまり、誤った熱心に突き動かされ、また誤った方法で何かをしていることはないでしょうか。そうして神が与えてくださっている様々な人間関係を壊していることはないでしょうか。そうしておきながら、相手が悪い、自分は正しいと思っていることはないでしょうか。私たちは誰かをさばく心が起こって来た時、まず自分の目に大きな梁があるのではないかと自己点検する者でありたいと思います。この点検を簡単にさらっとパスさせるのではなく、私たちが他の人の過ちをじっくり検討する時のように、いやそれ以上に厳しく問いたい。そして自分の内にある大きな梁を神によって、主イエス・キリストにあって取り除いていただくことをまず求めたい。そこで神がこの罪深い私に何をしてくださり、どのようにして今日、このように立たせてくださっているかをもう

一度知り、感謝するなら、私たちの他の人に対する態度は大きく変わって来るはずでしょう。そして神が私にしてくださったように、私もそのようにへりくだって他の人に仕えなければならないと突き動かされる。相手への真の愛を確かにして、その愛に包んで、相手を助けなければならない。そのように人々に関わることを通して、神が導き入れてくださった兄弟姉妹の交わりにおいていよいよ教会を建て上げる歩みへ、また周りの人々をこの祝福へ招き入れる歩みへ進みたいと思います。そして私たちの行いを通して、恵みに満ちたもう私たちの天の父を証しし、人々が天の父の御名を賛美することへと至る、その子どもたちの歩みへ進んで行きたいと思います。